東海心理学会第 54 回大会発表論文集, 2005/05/21, p.60　於　金城学院大学

自我漏洩感に関する研究

～共感性と発達の観点から～

○坂本佳織・佐々木淳・丹野義彦・宮本正一
(岐阜大学大学院教育学研究科・東京大学大学院総合文化研究科・岐阜大学教育学部)

自我漏洩感　共感性

<問題と目的>

対人恐怖と統合失調症には共通して、赤面恐怖、自己視線恐怖、自己臭恐怖、独語妄想、寝言妄想、考想伝播など、自己から他者へ「漏れ出てゆく」と感じる症状がある。これが自我漏洩症状（egrrhera symptoms）である（藤縄, 1972)。自我漏洩症状は、自己から他者に漏れ出るものが傍らにいる他者に不快感を与えると感じ（加害感)、その結果、他者にさげすまれ忌避されると感じる（忌避感）という特徴をもっている。佐々木（2003）は健常者がもつ、自我漏洩感と結びつくような体験をも対象とするために、「何も言わないのに自分の内面的な情報が伝わると感じ、ネガティブな結果が予測される体験」を「自我漏洩感」として定義し研究している。

本研究では、中学生、高校生、大学生を対象とし、自我漏洩感の体験頻度が年齢によって変化するのか、感じている状況に違いはあるのかについて検討することを第一目的とした。また、自我漏洩症状は、「自分の考えを他人が知る」「自分の臭いが漏れる」「自分が独語する」など、すべて、「自己の一部の客観化」として捉えることができる（藤縄 1972)。本研究では、この点に着目し、「自己の一部の客観化」を、他者の視点を取得する事と考え、他者の視点取得を必要とするものとして、「共感」を考える事とした。つまり、他者の立場に立って物事を考える「視点取得性」という共通点をもちながら、一方は、適応的に働き、一方は不適応的に働く、「共感」と「自我漏洩感」との関わりについて検討することを第二の目的とした。(「共感（empathy)」には、「他者の心理状態を正確に判断する認知能力」とする認知的側面を重視する定義と、「他者の心理状態に対する代理的な情動反応」とする情動的側面を重視する定義がある（登張, 2000)。本研究においては、その両側面を統合した立場から、共感をとらえている。）

<方法>

大学生 193 名（男 100 名, 女 93 名)、高校生 250 名（男 158 名, 女 92 名)、中学生 188 名（男 80 名, 女 108 名）の合計 631 名（男 338, 女 293 名）に対し質問紙を実施した。使用した尺度は、以下の２つ、あわせて５３項目であった。

① 自我漏洩感状況尺度（佐々木, 2004）の短縮版。(「苦手な相手」「赤面・動揺」「不潔」「お見通し」「賞賛」の５つの下位尺度からなる。短縮版は２５項目。体験頻度と苦痛度についてそれぞれ５件法で回答を求める。）

② 多次元共感測定尺度（Daivis ,1983）を桜井(1988）が日本語訳したもの。(認知的側面として「視点取得」「想像性」、情動的側面として「共感的配慮」「個人的苦痛」の合わせて４つの下位尺度からなる。２８項目。５件法で回答を求める。）

<結果と考察>

① 自我漏洩感状況尺度に関して

体験頻度、苦痛度どちらに関しても、自我漏洩感状況尺度のうち、「苦手な相手」状況、「不潔」状況、「賞賛」状況、「お見通し」状況、「赤面・動揺」状況のすべてにおいて、発達段階との間に有意な差が見られた。つまり、自我漏洩感をどの程度感じているのかという頻度が、中学校、高校、大学と年齢が上昇するにつれて、増加していくという事であり、苦痛度に関しても、頻度と同様、年齢の上昇に伴って増加しているといえる。つまり、自我漏洩感を感じ始める年齢の境界線が、中学生、高校生あたりに存在している可能性が示唆された。

性別に関しては、頻度では、「お見通し」状況と「赤面・動揺」状況において有意な差が見られた。苦痛度では、「苦手な相手」状況、「賞賛」状況、「お見通し」状況、「赤面・動揺」状況において有意な差が見られた。つまり、頻度より、苦痛度において男女差が見られた。

② 多次元共感測定尺度に関して

多次元共感測定尺度のうち、「視点取得」、「想像性」、「個人的苦悩」、「共感的配慮」のすべてにおいて、発達段階、性別との間に有意な差がみられた。これは、「共感」得点が、中学校、高校、大学と年齢が上昇するにつれて、高くなっていくという事である。また、これら４つすべてにおいて、女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。

③ 自我漏洩感状況尺度と多次元共感性尺度の関係に関して

自我漏洩感状況尺度の下位尺度５つと、多次元共感性尺度の下位尺度４つの間には、かなり高い相関がみられた。しかし、問題と目的で述べた、「視点取得」項目に関しては、それ以外の項目（「想像性」、「個人的苦悩」、「共感的配慮」）と比べるとそれほど相関は高くなく、むしろ、自我漏洩感は、「視点取得性」よりも、その他の、「想像性」、「個人的苦悩」、「共感的配慮」と強い関係をもつ事が示された。なぜ「視点取得」項目に関してそれほど高い相関が得られなかったのかについては、認知的側面に特化した別の共感性尺度を使用する事によりさらなる検討を行う必要があると考える。また、「共感」「自我漏洩感」ともに発達段階との間に有意な差があり、自我漏洩感を感じ始める年齢と、共感が高くなる年齢がリンクしている事が考えられる。

<引用文献>

佐々木淳・丹野義彦　2003　自我漏洩感を体験する状況の構造　性格心理学研究, 11, 99-109.

(SAKAMOTO, Kaori; SASAKI, Jyun; TANNO, Yoshihiko; MIYAMOTO, Masakazu)

東海心理学会第 55 回大会発表論文集　2006/06/24(土) (於)名古屋大学文学部

自我漏洩感に関する研究（２）

○坂本佳織・宮本正一
(岐阜大学大学院教育学研究科・岐阜大学教育学部)

Key Words：自我漏洩感　共感性

＜問題と目的＞

対人恐怖症と統合失調症には共通して、赤面恐怖、自己視線恐怖、自己臭恐怖、独語妄想、寝言妄想、考想伝播など、自己から他者へ「漏れ出てゆく」と感じる症状がある。これが自我漏洩症状（egrrhera symptoms）である（藤縄, 1972)。自我漏洩症状は、自己から他者に漏れ出るものが、傍らにいる他者に不快感を与えると感じ（加害感)、その結果、他者にさげすまれ忌避されると感じる（忌避感）という特徴をもっている。佐々木（2003）は健常者がもつ、自我漏洩症状と結びつくような体験をも対象とするために、「何も言わないのに自分の内面的な情報が伝わると感じ、ネガティブな結果が予測される体験」を「自我漏洩感」と定義し研究している。本研究では、上記、佐々木（2003）の定義を採用し、「自我漏洩感」という事とする。

本研究の目的は、昨年度の発表では不十分であった、「自我漏洩感状況尺度」（佐々木，2004）の得点の違いが、多次元共感測定尺度（Daivis ,1983）の得点、発達段階（中学生・高校生・大学生)、性別、とどのような関連を持つのか、さらに詳しく検討することである。そのため、本研究では、階層型クラスター分析（Ward 法）を用い、特徴を明らかにすることとした。

＜方法＞

大学生 193 名（男 100 名，女 93 名)、高校生 250 名（男 158 名，女 92 名)、中学生 188 名（男 80 名，女 108 名）の合計 631 名（男 338，女 293 名）に対し質問紙を実施した。使用した尺度は、以下の２つ、あわせて 53 項目であった。

① 自我漏洩感状況尺度（佐々木, 2004）の短縮版。(「苦手な相手」「赤面・動揺」「不潔」「お見通し」「賞賛」の５つの下位尺度からなる。短縮版は２５項目。体験頻度と苦痛度についてそれぞれ５件法で回答を求める。)

② 多次元共感測定尺度（Daivis ,1983）を桜井(1988) が日本語訳したもの。(認知的側面として「視点取得」「想像性」、情動的側面として「共感的配慮」「個人的苦痛」、計４つの下位尺度からなる。２８項目。５件法で回答を求める。)

＜結果と考察＞

「自我漏洩感状況尺度」（佐々木，2004）の下位尺度５つごとの合計得点から、階層型クラスター分析（Ward 法）を行った。その結果、大きく３つの群に分けられた（以下、クラスターⅠ～Ⅲとする)。各クラスターの特徴は以下の通りである。

○　性別・発達段階に関して（人数）

表１　性別に関して

	男	女	合計
クラスターⅠ	152	115	267
クラスターⅡ	29	25	54
クラスターⅢ	157	153	310

（χ^2 =2.278　n.s.）

表２　発達段階に関して

	中学生	高校生	大学生	合計
クラスターⅠ	142	114	13	269
クラスターⅡ	5	22	27	54
クラスターⅢ	47	117	148	312

（χ^2 =173.77　$p<.000$）

○　「自我漏洩感状況尺度」に関して

クラスターⅠ：５つの下位尺度全てと総合計において、得点がクラスターⅡ・Ⅲより低いという有意な差がみられた。

クラスターⅡ：「賞賛」以外の４つの下位尺度と総合計において、得点がクラスターⅠ・Ⅲより高いという有意な差がみられた。「賞賛」に関しては、得点がクラスターⅠより高いという有意な差がみられたのみであった。

クラスターⅢ：「賞賛」以外の４つの下位尺度と総合計において、得点がⅠよりも高く、Ⅱよりも低いという有意な差がみられた。「賞賛」に関しては、得点がクラスターⅠより高いという有意な差がみられたのみであった。

○　「多次元共感測定尺度」に関して

クラスターⅠ：４つの下位尺度全てと総合計において、得点がクラスターⅡ・Ⅲより低いという有意な差がみられた。

クラスターⅡ：「共感的配慮」、「個人的苦痛」の２つの下位尺度において、得点がクラスターⅠ・Ⅲより高いという有意な差がみられた。「視点取得」、「想像性」、総合計に関しては、得点がクラスターⅠより高いという有意な差がみられたのみであった。

クラスターⅢ：「共感的配慮」、「個人的苦痛」の２つの下位尺度において、得点がⅠよりも高く、Ⅱよりも低いという有意な差がみられた。「視点取得」「想像性」、総合計に関しては、得点がクラスターⅠより高いという有意な差のみがみられた。

以上の結果をまとめ、各クラスターの特徴を考えると、クラスターⅠは、自我漏洩感、共感性ともに低い群であるといえる。クラスターⅡは、その逆であり、自我漏洩感、共感性ともに高い群である。クラスターⅢは、Ⅰ、Ⅱの中間に位置する群である。また、発達段階に着目すると、クラスターⅠには中学生が多く、クラスターⅢには大学生が多かった。また、クラスターⅡに属する人は非常に少なかった。発達とともに、自我漏洩感、共感性ともに得点が増していくという前回発表した結果とあわせて考えると、クラスターⅢは健康的な群であり、クラスターⅡが病理群なのではないかとも考えられる。共感性の合計がⅡとⅢの間で有意な差がなかった事を考えると、自我漏洩感に関して病理群であっても、健康的な人と同様な程度の共感性を持ち合わせているといえるだろう。

(SAKAMOTO, Kaori; MIYAMOTO, Masakazu)